

英文学への旅

山川 鴻 三

ロンドンには、ディケンズの家、カーライルの家、ジョンソンの家があり、市の北郊ハンプステッドには、キーツの家がある。かつて文部省在外研究員として二カ月間ロンドンに滞在したとき、私はそういうところはくまなく訪ねた。ただ、作家の使った机や寝台、

自筆の原稿や書簡が展覧されているだけの、どこにでもある博物館である。またローマに

も、キーツの家があつて、私もローマへ旅行したとき、訪ねたことがあつた。今日観光地として有名になっているスペイン階段に臨んで、詩人の病死した部屋が残っており、館内には、キーツその他のロマン派詩人の文献が多数集められていた。その中には、日本人の書いたものも散見された。それからおそまきながら、英国最大の文豪シェイクスピアの生地、ストラットフォード・アポン・エイヴォンも、昨年の夏、グループツアーで英国を旅行したさい、見る事ができた。文豪の生家

の庭に、その作品に登場する草花や薬草が植えられているのが、印象的だった。しかし、それらの訪問は、通り一遍の、いわば儀礼的なものでしかなかった。私が本当に興味をもつて旅行し、いろいろな意味で深い感銘を受けたのは、最初のロンドン滞在のうちに、中部地方まで足を延ばしてロレンス・カントリーを訪ねたときと、今回の旅行でワーズワス・カントリーを訪ねたときとである。

ロレンスの生地は、ノッティンガム市の近郊にあるイーストウッドという寂しい炭坑村である。私は近所の人にロレンスの住んでいた家を探ねたが、その人は知らないという。私が日本からわざわざ来たのだという、その人は不思議そうな顔をして、ロレンスのことなど考えたことがないという。やっと尋ねあててみると、その家はまだ崩れそうになっているが、ロレンスが自伝小説『息子と恋人』の中で描いている、主人公ボールの家と一々同じなのだ。これにはびっくりした。見ると、近くの丘の上には、ロレンス（ボール）の父が働いていた炭坑が、昔のままに煙を上げてゐる。やはり来てよかったと思つた。

ところが、ワーズワスの生地、湖水地方はどうだろう。スコットランドの国境を越えて

走ることしばらく、バスは湖水地方にはいる。アルズウォータールの湖を通り過ぎて、高い山を登りつめると、ウインダーミアの湖が見えてくる。坂を下りて、湖のほとりで休憩する。町は観光客でごった返している。まるで銀座通りのようだ。ダヴ・カテッジと呼ばれた、グラスミア湖畔のワーズワスの家も訪ねた。昔は二階から湖が見えたというが、今は家が立ち並んで何も見えない。何という変わりようだろう。そこには、もはや、「ひとつの雲のように寂しくさまよつた」と歌つたワーズワスの「孤独の祝福」など、何もないのだ。これはいささか当て外れだった。

わが国と祖国英国とに外れる、この二人の文人の知名度の違いもさることながら、ここで私の心を捉えるのは、英国にも湖水地方のように観光の波に押し流されているところはあるとしても、ロレンスの炭坑村のように今日なお昔のままに石炭を掘りつつづけているという事実である。先年の二回にわたる石油ショックや今回のチェルノブイリ原発事故を考えると、これをただ時代後れと見なすだけではすまされないような気がする。

(やまかわ こうぞう 文学部教授)